

- 21世紀 心の時代に
この社会を誰が支えているのだろう
佐々涼子……………1
- 学習指導要領改訂と今後の学び 道徳科にお
ける「見方・考え方」 奈須正裕 ……4
- 道徳授業 私の実践
偉人の生き方に学ぶ～中江藤樹の「孝行」～
乾 道夫……………6
- SDGs×道徳 ……………8
- どうなるこれからの道徳授業……………10

道徳 ジャーナル

21世紀
心の時代に

この社会を誰が

支えているのだろう

父は若い頃、電信柱に上って電話線の保守を
していました。嵐が来そうなとき、ほかの家の
お父さんは家に帰ってきませんが、私の父は強い
風の吹く中、家を出て夜通し電話線を守り、朝
になると戻ってくるのです。当時は山梨県に住
んでいましたが、山々の中にキラッ、キラッと
光る鉄塔を見るたび、あれはどこまでつながっ
ているのだろうと想いを馳せたものです。

山には猿がいて、熊もいます。川の中にはカ
ニが、海には鮫もいるはず。幼い私には、
この生き物たちも電話線に悪さをするように思
えました。しかし、どんな生き物にも負けず、
どんな気象状況にも負けず、電話線は深い山や
川、海を越えて誰かの家とつながっているのだ
す。それは幼心に奇跡のように思えました。
父は大学へ進学したかったのに家庭の事情で
行けなかった苦学人。夜学に行きながら働いて



ノンフィクション作家

佐々涼子

いたのですが、根っから研究するのが好きな
人だったのでしょう。電話線は、崖や山をどう
やってつなぐのか、海底ケーブルはどうやって
敷設するのか、面白く教えてくれます。そんな
話を聞くと、その仕事の困難さや、つながっ
たときの喜びを想像したものでした。まだ衛星
による中継もなかった時代、ケーブルを伝って
耳に届く人々の声は、この社会を支えている誰
かによってつながれている。あの頃、父のよう
な人たちがたくさんいて、電話線を守っている
んだと思うと胸が熱くなったものです。

空を見上げると、道路に沿って電話線がたな
がっている。
孤独な人たちの声が、会えない恋人たちの声
が、アメリカや、刑務所や、病院や、人里離れ
た山の奥から、誰かのところへ届く。それは、
決して自動的に届くわけではなく、父のような

人によって支えられている。私にとつての仕事とは、嵐の前に出かけていく父の後ろ姿が象徴するものでした。

ところが、ほとんどの人は、電話の向こう側の声には関心があっても、電話を誰が、どんな風にしてつないでいるのか、嵐の中で作業をする人たちをほとんど気にしていないようでした。それが私には不思議でなりません。電話が通じないと文句を言い、復旧をすればしたで、感謝をするのではなく、やはり文句を言う人がいることに、私は首をかしげずにはいられませんでした。

震災でわかったこと

私は三十代後半で一念発起してライターズスクールに行き、フリーのライターになります。そこで偶然出会ったのがノンフィクションの編集者でした。その人に勧められて私は同時代に生きる人々を、取材して描くことになります。

私が書いた作品のひとつに、東日本大震災で壊滅的な津波の被害に遭いながら、奇跡的に復興を遂げた日本製紙石巻工場のノンフィクション『紙つなげ！ 彼らが本の紙を造っている』があります。

震災当時一時的に紙が市場からなくなり、雑

誌などの出版が滞った時期がありました。そのとき、私は編集者にこう言われたのです。

「知ってました？ 東北に大きな紙の工場があったね。そこが被災したそうですよ」

それを聞いて驚きました。私は本を執筆し、雑誌に寄稿しています。紙にさんざんお世話になっているのに、その紙がどこから来ているのか知らなかったのです。私たちの仕事はずっと東北に支えられていたのに、そんなこと気にしたことともなかった。そして、いつの間にか紙が市場に供給されると、また紙のことなど忘れてしまったのです。

そんなある日、早川書房の編集者から声を掛けられます。早川書房はSFやミステリの出版社というイメージがありました。そんな会社が私に何の用事があるのだろう。不思議に思いながら出版社まで出向くと、私はこんな提案をされるのです。「興味があったら、取材をしてみませんか。東日本大震災の大津波で壊滅的な被害を受けながら、半年で復興した日本製紙石巻工場の話です」

早川書房の副社長、早川淳さんは言います。「僕ははずっと製紙会社にお世話になってきました。この復興の記録を残すのは僕らの使命だと思っんですよ」

こうして私の取材は始まりました。

紙にこめられた想い



現在の日本製紙石巻工場。
1平方キロメートル、約33万坪という広さを誇る。
写真提供：日本製紙株式会社

太平洋岸に面して造られていたこの工場は、二〇一一年三月に起きた東日本大震災で、高さ四メートルの津波に襲われます。その日出勤していた従業員は全員無事でしたが、車や家屋が流れ込み、近隣住民の遺体も発見されました。非番の人や、従業員の家族にも亡くなった人が

出ています。建屋の一階部分はすべて泥水に浸かり、工場はすべての機能を失いました。

技術系の社員は「絶対に復旧は無理。新しい工場を造った方が早いんじゃないか」と思った」と述べています。

しかし、この絶望的な状況の中、半年でマシン一台を回すという工場長のもと、復旧作業が開始されます。電源を喪失した中、工場の人たちは手で泥を掬い（すく）だしました。風呂にも入れず、過酷を極めた復旧作業でした。夏になると大量の震災蟻が発生し、近隣漁港の腐った海産物からは強烈な腐敗臭がしてきたそうです。街も一時的に治安が悪化し、誰もいなくなった店には泥棒が入り、パトロール隊が組織されました。

そんな当時の過酷な状況を聞く一方で、強く私の心に残ったのは、現場の社員たちの紙に対する愛情でした。

例えば文庫。紙はどれも同じに見えますが、各出版社によってそれぞれこだわりがあります。例えば新潮文庫はよく見ると、ほかの文庫用紙よりわずかに赤みがかっています。これは、当時の名物編集者の執念のようなこだわりによって生み出されたものです。角川文庫の紙も特徴的で、ほんの少しオレンジです。これは若者向けにカジュアルな雰囲気を作っているのです。

そして子どもたちの使う教科書は、何度めくっても、雨や給食の牛乳でぬれても、ボロボロにならない様々な工夫が施されているのです。

出版用紙を造っている8号機の当時のリーダー佐藤憲昭さんは、こんなことを言うのです。

「いつも部下たちにはこう言って聞かせるんですよ。『お前ら、書店さんにワンコイン握りしめてマンガ雑誌を買いに来るお子さんのことを思い浮かべて作れ』と。小さくて柔らかい手でページをめくっても、手が切れたりしないでしょ？ あれはすごい技術なんですよ。一枚の紙を厚くすると、こしが強くなって指を切っちゃう。そこで、パルプ繊維の結合を弱めながら、それでもふわっと厚手の紙になるように開発してあるんです」

紙はこんな優しい気持ちで作られているのです。紙も電話線も同じ。電話はつながるのが当たり前だから、普段はつなげている人など意識されません。紙も同じで、そちらに意識がいつてしまう紙だと読書に集中できませんから、いい紙とは言えないのです。しかし、私たちの社会はこういった人たちの無名の仕事によって成り立っているのです。

この本が上梓され、書店営業に行ったときのことです。ある書店の立派な店長さんが、この本を前に涙を流して言いました。

「佐々さんには申し訳ないけれど、この本は僕の本です。僕は本が大好きで、書店に入りました。本を触るのが大好きだった。しかし、いつの間にか日々の業務に追われて、あの頃の喜びを忘れていた。それを思い出させてくれました。この本は僕が売ります」



『紙つなげ! 彼らが本の紙を造っている』佐々涼子 (早川書房)
定価: 814円 (本体740円+税)
ISBN 978-4-15-050486-1

おわりに

石巻工場は今も出版用紙を造っています。数々の大ヒットコミックの紙はこの石巻産です。今はデジタル化が進み、クリックひとつで物が届き、ますます人が見えなくなりました。しかし、それを運んでいるのは人、生産しているのも人なのです。子どもたちにはそこに想いを馳せる人であってほしい。私たちの社会は誰によって支えられているのかを理解できる大人になってほしいと願っています。

(ちや りょうこ)

学習指導要領改訂と今後の学び 道徳科における「見方・考え方」

上智大学総合人間科学部教育学科教授

奈須 正裕

小学校では二〇二〇年度から、中学校では二〇二一年度から全面实施となった新しい学習指導要領。今回の学習指導要領改訂の背景と方向性、その中で明確化された「見方・考え方」によって子供の学びはどのように変わるのか、さらに、道徳科の「見方・考え方」について、奈須正裕教授にお話を伺いました。

子供の生きる力を育む

新しい学習指導要領の改訂にあたっては、まず教育課程企画特別部会が立ち上がり、十か月間議論しました。従来は各教科部会の結果を集約して教育課程ができあがる方式でしたが、今回はまず教育課程の大枠を確定し、それを実現するために各教科は何をすべきかを議論しました。

教育課程企画特別部会では、子供たちが生きる社会が将来どうなっていくか、予測できることをすべて考え、そこで必要となる資質・能力を育むため

に学校は何を教えるのか、という切り口で議論が重ねられました。では、今回の改訂について大まかなポイントをお話しします。

まず、変化の大きなこれからの時代を生き抜くための資質・能力を子供たちに育むには、「社会に開かれた教育課程」の実現が欠かせないとして、「地域と学校の連携・協働の推進が重要である」と、新学習指導要領の「前文」で明記されました。これは、地域社会や企業等に対して教育現場を開かれたものにする意味もありますが、社会の中で生きていくために学び育まれた力が、子供を確実に支えられるよう

にする、という意味もあります。

育成を目指す資質・能力については、教育課程全体や各教科などの学びを通じて「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」という三つの柱を示し、より明確化した教育目標・内容を重視しています。これにより、組織的かつ計画的に教育課程の質の向上を図っていくカリキュラム・マネジメントがより重要になりました。

そして、今回の改訂理念を実現するために、教育課程全体を通じて、教科横断的な視点を持ち、教科、学年を越えた学校全体としての取組を行うこと

が求められています。まさに、コンテンツ主義からコンピテンシー（資質・能力）主義へ移行するということです。学校は教育課程で「教員が何を教えるか」よりも「子供が何をできるようになるか」という観点で育成を目指す。つまり「子供の視点に立つ」ことが明示されました。「主体的・対話的で深い学び」アクティブ・ラーニングの視点へとつながるのです。

「見方・考え方」と今後の学び

「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善で目指す「深い学び」の中核を成すのが「見方・考え方」です。この「見方・考え方」は、すでにもっている知識・技能と新しい知識・技能とを結び付けながら、将来子供たちが社会に出た際にも活用できるものです。思考力・判断力・表現力を用いてあらゆる物事を総合的に関連付けてより深く理解したり、社会や世界にどのように関わるかの視座を形成し、課題を見出して解決策を考えたりするために重要なものです。

習得・活用・探究という学びの過程

でこの「見方・考え方」が活用されれば、資質・能力がさらに伸ばされ、新たな資質・能力が育まれれば、「見方・考え方」がさらに豊かになる、という相互関係にあります。

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、日々の授業を改善するための視点を共有し、取組を活性化していくとするのが、今回の学習指導要領改訂の主眼となります。

この「見方・考え方」には各教科等の特質が表れ、資質・能力の育成に必要な役割を果たすことから、授業のねらいの明確化と具体的な実践が求められます（表参照）。結果として「主体的・対話的で深い学び」アクティブ・ラーニングの実現につながります。

コンピューター（資質・能力）主義にして、コンテンツを系統化・構造化し、教科間連携を進めると、学習内容や学習時間を圧縮できます。そして、子供たちが考え、議論する時間や、学んだことを発展応用して何かを作り、表現する時間を多く取ることを目指しているのです。

道徳科の「見方・考え方」とは

学習指導要領で「考え、議論する道徳」を目指す趣旨に照らして考える

と、道徳科における「深い学び」の鍵となる「見方・考え方」は、改訂で目

標に示されている「様々な事象を、道徳的諸価値の理解を基に、自己との関わりで（広い視野から）多面的・多角

的に捉え、自己の（人間としての）生き方について考えること」（平成二十八年十二月中央教育審議会答申…括弧内は中学校）であると言えます。道徳科における「見方・考え方」とは、道徳科の目標に示している学習活動そのものなのです。

道徳科は、世の中をどのような視点で捉え、どのような枠組みで考えたらいいのか、物事に対する「見方・考え方」を身に付けて深く理解したり、多様な人との対話で考えを広げたり、学ぶことの意味と自分の人生や社会の在り方を主体的に結び付けたりする学びです。答えが一つではない道徳的な課題を、子供一人ひとりが自分自身の問

表 各教科等における「見方・考え方」（一部抜粋）

国語	言葉による見方・考え方：対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めること
社会	社会的事象の見方・考え方：社会的事象を、位置や空間的な広がり、時期や時間の経過、事象や人々の相互関係などに着目して捉え、比較・分類したり総合したり、地域の人々や国民の生活と関連付けたりすること
算数	数学的な見方・考え方：事象を数量や図形及びそれらの関係などに着目して捉え、論理的、統合的・発展的に考えること
理科	理科の見方・考え方：自然の事象・現象を、質的・量的な関係や時間的・空間的な関係などの科学的な視点で捉え、比較したり、関係付けたりするなどの科学的に探究する方法を用いて考えること
生活	身近な生活に関わる見方・考え方：身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、よりよい生活に向けて思いや願いを実現しようとする
音楽	音楽的な見方・考え方：音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や文化などと関連付けること
図画工作	造形的な見方・考え方：感性や想像力を働かせ、対象や事象を、形や色などの造形的な視点で捉え、自分のイメージをもちながら意味や価値をつくりだすこと
家庭	生活の営みに係る見方・考え方：家庭科が学習対象としている家族や家庭、衣食住、消費や環境などに係る生活事象を、協力・協働、健康・快適、安全、生活文化の継承・創造、持続可能な社会の構築等の視点で捉え、生涯にわたって、自立し共に生きる生活を創造できるよう、よりよい生活を営むために工夫することを示したものの

（※小学校学習指導要領解説及び答申別紙をもとに筆者が作成）

題と捉えて向き合う「考え、議論する」授業の実現が求められます。そのため、道徳的価値への方向付けと問題意識を喚起して、子供たちに何について考えさせ、何に気付かせたいか、授業観を明確にもつことが必要です。指導案や指導方法、教材等の工夫は、目的ではなく手段であると再認識し、道徳科の授業を要として学校の教育活動全体を通じて行われていくのが道徳教育です。

これからの時代を生きる子供たちには、多様な価値観の存在を認識しつつ、自ら考え、他者と対話し協働しながら、よりよい方向を模索し続けるために必要な資質・能力を備えることが求められます。この資質・能力を育成するため、道徳教育はますます重要になっていくと言えるでしょう。

（なす まさひろ）

道徳授業私の実践

鳥取県岩美町立岩美北小学校
教諭
乾 道夫

偉人の生き方に学ぶ

中江藤樹の「孝行」

内閣府のホームページに、若年無業者という言葉を見つけた。十五歳から三十四歳の非労働力人口のうち、家事も通学もしていない人のことであるという。「学校以外で進学や資格取得などの勉強をしている」「病気・けがのため」という理由が多いようだが、「知識・能力に自信がない」「特に理由はない」といったものも少なくないことを知った。

小学生の頃から、「こうなりたい」と夢や目標をもつことができたなら、なりたい自分が見えてくるのではないだろうか。生き方の支え・モデルとなる

人に出会い、その人物の生き方に触れることで、自らの生き方を見つめられるのではないだろうかと考えた。

偉人との出会い

「近江聖人」と呼ばれた中江藤樹の生き方を教材化し、授業で扱った。相手を大切にし、尊敬することから人間関係は成立すると、多くの人に説いた藤樹の生き方に触れ、その姿に学ぶことは、これから大きく成長する時期を迎える児童にとって有益であると考えた。教材化の際は、人物の功績だけを取

り上げるのではなく、年譜を作成したり、生涯が見える文章にしたりして、人物の苦悩や葛藤が見えるよう工夫した。

教材について

○教材名 人として生きる道 中江藤樹の孝行（自作教材）
○主題名 孝をつくす
○内容項目（主として）感謝
一六〇八年に近江国小川村の農家に生まれた藤樹は、武士であった祖父の家を継ぐために祖父の住む米子で生活することとなり、後に国替えのた

め、伊予国大洲へ移り住んだ。新しい時代を見据えていた祖父は、藤樹に学問を勧め、藤樹は熱心に学んだ。十歳の頃、『大学』という本から、「人は学ぶことで立派になることができる」という一節を見つけ、立派な聖人になりたいと大きな目標をもった藤樹は、亡くなるまで自分の目標に向かって学び続ける。

祖父母を亡くした後、十七歳の頃父を亡くした藤樹は、小川村に残っている母が気がかりでたまらず、母のもとに帰る決心をした。殿様に武士を辞めることを願い出たが、優秀な人材である藤樹を手放せない殿様は許さなかった。藤樹は許しを得ないまま、大洲藩から出ていくことにした。

刀を売って得た金で商売を始め、酒の販売をしたり、米を買って農家に貸し、利息を得る仕事をしたりして生活した藤樹は、いつも相手のことを思い、酒は売る量を抑え、米の利息は驚くほどの低利息とした。「孝行」を親に對してだけでなく、周りの多くの人に對して実践したのであった。藤樹の教えを学んだ村人は、皆同じように相手を大切にしていたという。

藤樹にとつての「孝の行い」は、相手を大切にしている行いであった。「相手を愛し敬うことが大切だ」と、人としての生き方を伝えた藤樹は、四十歳で世を去ったが、彼の大切に生きた生き方は、今も受け継がれている。

授業の実際

【事前学習】

授業の二週間前に教材を配布し、範読をした。時代背景については時間のあるときに説明をし、児童には予習として何度も読むこと、配布したワークシートに感想を書くこと、そして藤樹についての調べ学習をさせた。教室には藤樹の伝記や資料を配置し、教材で触れられなかった藤樹の姿に触れられるようにした。

【導入】

中江藤樹はどんな人であったかを探ねた。「優しい人」「頭のいい人」といった発言だけでなく、「多くの人に尊敬された」「家族のために行動した」など、藤樹との出会いから感じたことを伝え合った。

【展開】

教材に表された藤樹の姿から考えるようにした。

発問①なぜ、命の危険がある脱藩をして故郷へ帰ったのだろうか。

・大切な人をこれ以上失いたくない。
・自分が帰るしかない。

・命がけで行動するだけの思いがあった。

自分の寂しさを紛らわせるためではなく、相手のために行動したことに気付かせたいと考えた。

発問②藤樹が多くの人に影響を与えられたのはどうしてだろう。

・藤樹が伝えた孝の行いに感動した人が、人々に受け継いでいったから。

・人のために役立つことをしたから。
・教えを伝えるだけでなく、自分自身が実践していたから。

藤樹のもとに現れる人々が私欲のない行動をするのは、人々に教え諭したことを藤樹自身が実践していたからであることに気付き、人々の信頼、尊敬を得たことに児童が触れたように思う。

発問③藤樹の教えや生き方から、何を学び取ったか。

・どんな状況でも相手のことを考え、

行動すること。

・自分の考えを貫くことの大切さ。
・物への欲のない姿。

・五事を正すことの大切さ。
五事は「貌・言・視・聴・思」のことであり、和やかな表情、思いやりある話し方、物の見つけ方、傾聴する聞き方、真心の大切さを表したものである。

教材では触れていなかったが、事前に調べたり考えたりすることで、藤樹に深く触れようとした姿が見られた。

この授業は、四年生を担任するたびに、過去の授業を振り返りながら実践を行っている。五年前に実践した際は、初めに「藤樹は」と発言していた児童が、発問③で「藤樹先生は」と発言した。その児童は「自分にとって、藤樹さんは先生のような人です」と、語った。教材を通して出会った人物が、その子に生き方のモデルを与えた師のような存在になったのだと感じた。

【終末】

藤樹は人として生きるために一番大切な姿が「孝の行い」であると考えた。誰に対しても、どのような状況にあっても、感謝の心もち続けた人であったと思うと子どもたちに語りかけた。

おわりに

この授業は、四年生を担任するたびに、過去の授業を振り返りながら実践を行っている。五年前に実践した際は、初めに「藤樹は」と発言していた児童が、発問③で「藤樹先生は」と発言した。その児童は「自分にとって、藤樹さんは先生のような人です」と、語った。教材を通して出会った人物が、その子に生き方のモデルを与えた師のような存在になったのだと感じた。

教科書にも、多くの偉人や実在する人物が登場している。子どもたちがこうした人物に出会い、その生き方を自分の生き方のモデルの一つとすることができれば、なりたいたい自分に近づけるのではないだろうかと思う。

(いぬい みちお)



SDGs× 道徳

連載 第6回

●はじめに

本校を含む只見町内の小中学校4校では、海洋教育の視点を付加したESDを行っている。令和元年度より、校長をはじめ担当教師が町内外の実践例を学び、子どもたちが意欲的に学ぶ姿を他校で目の当たりにした。これをきっかけにESDを取り入れた活動に本格的に着手した。結果から言えば、海洋教育の視点を入れたことにより、本校では俯瞰的に物事を見たり、身近なことに目を向けて行動したりできる生徒が増えてきた。また、地域住民からの応援が、生徒の学習意欲の向上にもつながった。

●海洋教育の視点を付加したESDの活動

①海浜のクリーンナップ作戦

海洋教育への取り組みのきっかけとして、海辺のゴミ拾いと、海での魚釣り体験を行った。海辺のゴミ拾いでは、生徒が予想していたようにペットボトルなどのプラスチックゴミ（以下プラゴミ）が多く、ゴミ袋13袋分のゴミを回収した。海辺に住む人たちが捨てたゴミだけでなく、上流の河川から運ばれるゴミが多いのではと考える生徒もいた。河川の上流地域で生活する自分たちが注意することが、海の環境を良くすることにつながると考えられるようになった。この体験が地球環境を考えるきっかけになり、もっと学び、深く関わりたいという探究心に火がついた。



SDGs実践紹介②

新聞紙レジ袋で 地域を一つに

福島県只見町立只見中学校 教諭 目黒英樹

②新聞紙でレジ袋作り

海辺で見たゴミは生徒たちにとって非常に印象深く、どうかしなければならぬ、と考えるようになった。学校に帰ってから「ペットボトルを購入しない」「レジ袋はもらわない」などと宣言し教室に掲示していた。只見町は海から遠く、気軽に足を運ぶことはできないが、自分たちの町からゴミを減らすことで、何らかの改善ができると思った。しかし、自分や家族だけでは減らせる量に限界があり、良い手段を見つけることができず、手をこまねいていた。

只見町では2月に大規模な雪まつりが開催される。来町者が最も多い期間であり、訪れる人たちに海の現状を知ってもらうことにした。ピラを配って来町者に周知する計画だったが、生徒の一人が「新聞紙で作るレジ袋」をインターネットで見つけてきた。ピラを入れた新聞紙レジ袋を、雪まつり会場の近くのコンビニで使ってもらうことを発案した。新聞紙なら手に入りやすく、プラゴミも減らせるなど、生徒たちのねらいに沿ったものとなった。

この新聞紙レジ袋は、形や強度など試行錯誤して現在の形になった。残念ながら当時は既存のプラレジ袋より濡れに弱く、レジ袋が無料配付されていた時期にはあまり広がらなかった。

しかし、2020年7月からレジ袋が有料化され、新聞紙レジ袋が注目され始めた。県内のマスコミに取り上げられたことで、注目度は上がっていった。当初単学年で作っていた新聞紙レジ袋だったが、下級生にも協力してもらい、たくさんのレジ袋を作ることができるようになった。現在では月間約300枚の新聞紙レジ袋が本校から出荷され、町内10店舗に置いていただき、海洋プラゴミ削減のメッセージを広めている。

●学校におけるSDGsと道徳

この活動は、道徳との関連が強く「D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること」の学びにねらいを定めていたが、実際に取り組む中でさらに広がりが見られたことに驚いた。生徒たちの活動が広く知られるようになり、たくさんのメールや電話など励ましの連絡をいただいた。その中でも、手紙での励ましが道徳的な心情や実



お店に新聞紙レジ袋を置いてもらう交渉をする生徒。

実践意欲と態度をより育んだ。人の優しさに触れることにより、思いやりの心をもつと共に、自分たちの考えや意見を入れて、お礼の返信を出すこともできた。また、社会から注目されることで、学校の一員として自信と自覚をもって生活できるようになり、校内外での挨拶が以前にも増して向上するなど相乗効果を生み出すことができた。

●おわりに

新聞紙レジ袋を作り海洋ゴミを減らす活動は、環境教育のねらいを果たす他に町を活気づける潤滑油として機能した。中学生に刺激されて、何か環境活動をしなけければならないと考えた只見町の大人は多い。また、教育委員会も「新聞紙レジ袋作成教室」を開催し、中学生を先生に立て、町民と中学生の交流の場となった。それからというもの、町民の作成した新聞紙レジ袋が、定期的に学校に届けられている。

今後の展開として、自分たちの活動を積極的に発信したいと考えている。町の映像担当者の指導を受けながら、活動を映像化し、より多くの人に伝えていきたい。



新聞紙レジ袋作成教室の様子。

●只見中学校の実践のポイント

只見中学校は小学校から続く海洋教育の学びを継続し、発展させています。その活動の3つの特徴について紹介します。

①Think Globally, Act Locallyの実践

海洋教育の一環で始まったESD活動において、海辺のゴミ拾いを起点として、地域の河川から世界の海へというつながりを意識した上で、「今自分たちができることは何か」という問いの答えを探りました。その結果、新聞紙レジ袋の作成にたどり着き、地域と連携して、予測～行動～振り返り～発展という学びのプロセスを通して実践を少しずつ広げました。これは、「地球規模のことを考え、地域で実践する」というESDの大切にしている価値観を実践した活動です。

②パートナーシップの実現

只見中学校は、教師が主体的に地域と関わって、生徒たちの活動が広く受け入れられる環境をつくり、「社会に開かれた教育課程」を実行しています。毎月300枚の新聞紙レジ袋を10店舗へ継続して出荷できていることも、その成果でしょう。

また、只見中学校では生徒にコンクール等への挑戦を促し、入賞したものを町の広報誌や新聞で丁寧に発信してきました。それによって、地域の理解が深まり、協力が増えました。結果、この活動を中心として、世代を超えた交流や、小学校からの学びの継続といった多種多様なつながりが生まれています。

昨年始まったレジ袋有料化など、今まさに起きている本物の課題に関わることで、生徒や地域の人が社会に参画している実感を得られます。これが学習意欲やさらなる発展への動機付けになっていると考えます。

③感謝の気持ちを大切に

只見中学校の実践では、SDGsを教育で扱う上で重要な「知識・思考力」、「社会・感情」、「行動」という3つの領域をまたいだ学びを実践しています。活動を通して様々な感情を扱い、行動や学習意欲につなげています。

地域の人たちからの励ましや応援の言葉に対する感謝の気持ち。この感謝の気持ちが、誰かのために何かをしようという原動力になります。感謝の気持ちを相手に伝える行動を重ねると、主体性が発揮されます。この普遍的な学びのデザインはどのような規模の学校においても参考になるでしょう。

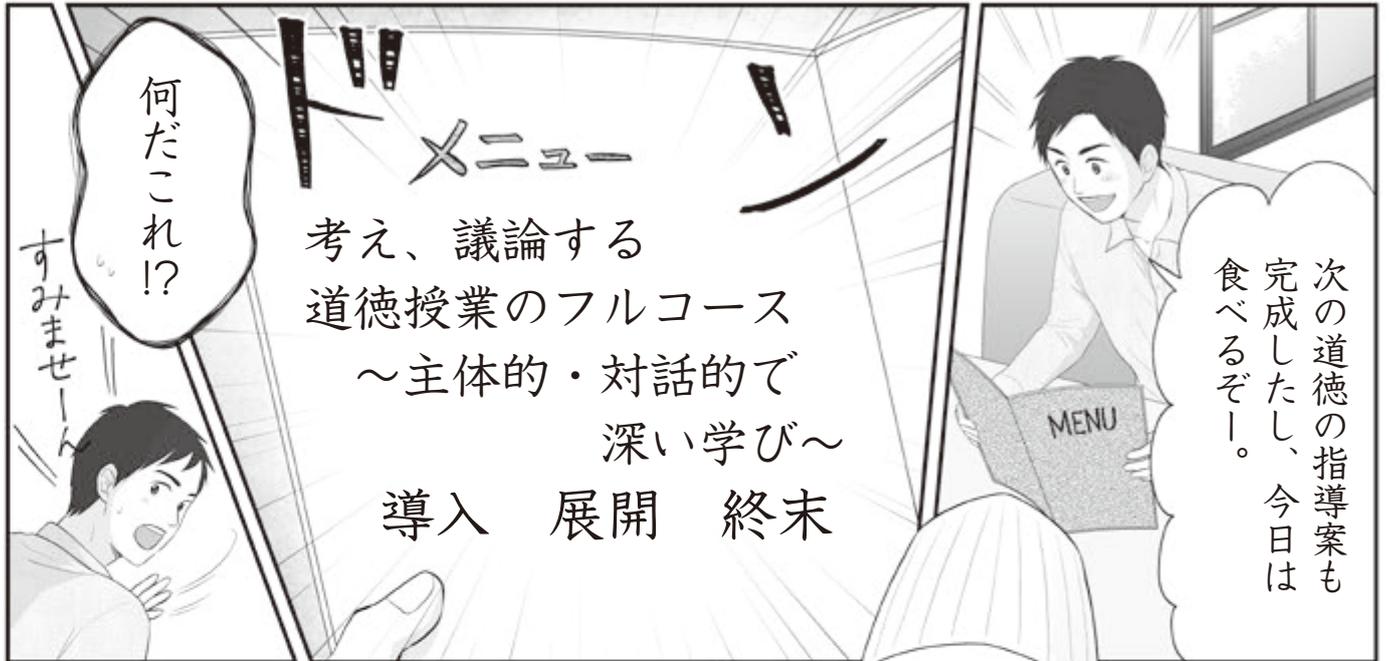
どうなるこれからの道徳授業

連載12回 学習指導過程編

とくちゃん

監修・法政大学兼任講師 廣瀬仁郎先生
マンガ・のはらあこ

学先生



導入のポイント

- ・主題への興味、関心を高める。
- ・主題と自分との関わりを意識させる。
- ・本時で考えたい課題を明確にする。(学習テーマを設定する場合)

導入の工夫

- ・写真や映像から問題意識を抱かせる。
- ・事前にアンケートをとって、自分との関わりを意識させる。 など



導入は、主題に関する子どもたちの興味関心を高めて学習の動機づけをする段階だよ。

展開は、ねらいに迫る中心の段階だよ。



展開のポイント

- ・抑揚や感情を込めて範読して、教材に浸らせる。

教材提示の工夫

- ・場面絵やペープサートの活用。
- ・プレゼンテーションソフトを使った動きのある教材提示。 など



- ・教材の中の問題点や人物の生き方について多面的・多角的に考え、道徳的価値への理解を深める。
→自分なりの納得解を見つける。(学習テーマを設定した場合)

教材追究の工夫

- ・精選した発問の投げかけ。
- ・話し合い活動の充実 (ペア、グループ、全体)。
- ・表現活動の充実 (動作化や役割演技)。

- ・自らを振り返り、生き方についての考えを深める。

振り返りの工夫

- ・書く活動や自分を見つめる時間をつくる。



つい時間が足りなくて
あわただしく終えてしまっけど
余韻が大切なんだね。

終末のポイント

- ・印象的で心が温まり、今後の発展につながるよう工夫する。

終末の工夫

- ・教師やゲストの体験談、新聞やテレビで取り上げられた問題などの説話をする。
- ・詩やことわざ、写真など短く印象的な資料を活用する。

終末は道徳的価値に対する
自分の考えをまとめたり
実行することのよさや難しさを
確認したりして
今後につなげる時間にしよう。

12



次回は、道徳科の
オンライン授業に
ついてご紹介!

ぜひ知りたい!
また来るよ!

ごちそうさま!!

このコースはあくまでも
基本。問題解決型
体験学習重視型など
いろいろな学習過程を
組むともっと
魅力的になるよ。

道徳ジャーナル110号 令和3年8月発行

発行所 株式会社学研教育みらい 発行人 甲原 洋／編集人 木村友一

本誌のお問い合わせ先…小中教育事業部 〒141-8416 東京都品川区西五反田2-11-8

内容については…TEL (03) 6431-1565 (編集) それ以外のことは…TEL (03) 6431-1151 (販売)

「学研 学校教育ネット」 <https://gakkokyoiku.gakken.co.jp> ●「道徳ジャーナル」のPDF版および電子版は、WEBページから。

9300007571

LINE 公式アカウントのお知らせ

@おんたま先生 学研教育みらい

道徳や体育・保健体育、特別支援教育、ICT教育などの最新情報の配信や、先生のお悩みを投稿できるサービスを提供しています。

友達
募集中!



QRコードをスキャン
するとLINEの友達に
追加されます。